緑色の海藻・アオサに付いているゴカイやトビムシなどの餌を食べるハマシギ。体力をつけて３日ほどで次の中継地へ向かう

photograph 写真館

渡り鳥 憩いの場へ

福岡・名島海岸 中継地として再生着々

博多湾東部に位置する福岡市東区の名島海岸。北に香椎パークポートと人工島、南に箱崎ふ頭と、埋め立て地に囲まれた長さ1キロにも満たない小さな海岸だが、渡り鳥の貴重な中継地として「再生」しつつある。

一帯はかつて多々良川河口から広大な「名島潟」が広がり、カブトガニも生息する豊かな干潟の海だった。戦後、経済の成長に伴い次々と埋め立てが進んだ。1970年代には海岸のすぐ背後まで宅地や畑が迫り、飛来する渡り鳥は激減した。

海岸の復活を願う地元の要望で2007年に砂浜化工事が行われたが、この工事で渡り鳥が餌場にしていた岩礁がさらに減った。危機感を募らせた環境NPO「ふくおか湿地保全研究会」などの働きかけで、福岡市は渡り鳥のため海岸の沖に石を積み上げた「人工岩礁」を3基設置した。

餌場と休息場所の再生。これによって春と秋に飛来するシギ類の数が増えた。

海岸に漂着するアオサは悪臭を放つ厄介者だが、餌場にもなるため昨年から回収方法を少し変えた。4～5月の飛来期だけ大型重機を使わず一部を海岸に残したところ……、研究会によると、昨春はハマシギの飛来通過数が一気に2500羽に達し、今年も既に2000羽を超えたという。

研究会代表の服部卓朗さん(58)は「かつての規模には遠く及ばないが着実に増加している意味は大きい」と手応えを感じている。

【写真・文 野田武】

海岸の清掃活動をする地元の帆柱町自治会の有志。地域の人たちが保護活動に参加しているのも名島の特徴だ

オーストラリアから渡り鳥の調査に訪れたアラン・スチュ
保護していくことがとても重要」と話す。右後方は石を積

三温物語 さんとう
武 明 堀
別府の里プラン
個室露天風呂付客室